



特集1◎ゆく歳くる歳を飾る掛物としつらい

寒さ暖かさを一幅の絵から感じることに

◎談話
武井智宏（加島美術）



与謝蕪村 案山子画賛 本紙 98.0×27.0cm

今回、冬から春へとというテーマをいただいたので、こちらで7点の掛物を選ばせていただきました。

まず初めにご紹介するのは、与謝蕪村の案山子画賛です。賛文には「雨乞の小町がはてや落とし水」とあり、小野小町が勅命で雨乞いの和歌を詠み、その功德で雨が降ったという伝説を題材にしていますが、その伝説を知らなくても、この絵からは奥深い世界を感じ取れます。

筆の勢いだけで簡略に描かれたように見えますが、画面の中では風が吹きすさび、いまにも雨が落ちてきそうな緊張感があります。案山子は風に煽られ揺れています、細

いながらも力強く描かれた足は風に向かうように立ち、その身体を支えています。そうした情景の音までが聞こえてきそうです。

たとえば寒い冬の一日、この絵をかけ、敢えて暖房を入れずに眺めてみてください。部屋の中を木枯らしが吹きあれるような感覚を味わえるかもしれません。やり過ぎては風邪をひいてしまいますが、たとえ一瞬でも冬の荒れ野に立つこの案山子に気持を仮託できれば、あたたかな我が家を改めて感じる事ができると思います。一幅の絵にはそんな力があるんです。